署名の弱いデザイン

—積雪寒冷地における冬期デザイン教育の試み—

Design with a Weak Signature

--- Case Study on Design Education during Winter Time in Snow Latitudes ---

藤森 修[1]，林 拓見[2]，伊藤 明彦[2]

Osamu Fujimori[3], Takumi Hayashi[4], Akihiko Itoh[4]

要 旨

これは現在，東海大学旭川キャンパスに設置中の環境芸術作品の報告である。本学の有志学生が中心となり作業を行い，冬期にキャンパス内に設営したものである。創作者としての作者の署名を最小限に留めた作品の「人工性」と「降雪現象」との協働により，思いがけない雪景が現れることが確認された。

Abstract

The aim of this report is to show a variety of snow-scapes in our artworks, which were set on Asahikawa campus by voluntary students. Unexpected snow-scape has been produced by collaboration between natural snowing phenomenon and artificiality with designer's minimum intention, or a weak signature.

キーワード： ランドスケープデザイン，署名の弱いデザイン，雪景

Keywords: Landscape Design, Weak Signature Design, Snow-scape

1. はじめに

これはスチールと合板からなる簡素なユニットによる環境芸術作品である。計 40 台製作し，昨年の 10 月末に旭川キャンパスに配置した。ここでは降雪時にユニット周辺に現れるささやかな雪景の変化に注目した。

本研究では作者が作品を全てコントロールするという優位性や，作者の個性を前面に出す従来の方法の対極にあるデザイン方法を，署名の弱いデザインと考えた。作者〇〇という署名が作品に明瞭に残されていないデザインのありようである。雪をテーマにした環境芸術には前例があるのだが，あくまでも雪を素材として人為的に制御して作品を作るというものに限られている。本研究では作者が制御できない雪の降雪現象に注目した点で前例は無いと思われる。

本研究の実施に当たっては，芸術工学部の有志学生らが積極的に参加した。通常の演習授業では，ある縮尺でのスケールモデルの製作に終始するというデザイン教育の限界があるのだが，

[1] 東海大学芸術工学部建築・環境デザイン学科，070-8601 旭川市神居町忠和 224

[2] 東海大学芸術工学部くらしデザイン学科，070-8601 旭川市神居町忠和 224

[3] Department of Architecture and Environment Design, School of Art and Technology, Tokai University, 224 Chuwa, Kamui-cho, Asahikawa 070-8601, Japan

[4] Department of Art and Design, School of Art and Technology, Tokai University, 224 Chuwa, Kamui-cho, Asahikawa 070-8601, Japan

本研究を通して学生等は実寸の現物に触れ，考える機会が生む教育効果を期待した。原寸モデルの溶接・組み立て等は外部委託であるが，塗装や調整，配置は全て学生が行った。

作品の配置場所は有志学生らが旭川キャンパス内の特徴ある場所を 2 箇所見出した（詳細は後述による）。本年度では配置場所の違いによって異なる雪景が現れるという発見とそれらの姿・かたちについて学生と共に良し悪しを話し合うことを目的としている。詳細の設計が至らず強風により横倒しになったり，配置場所に近接する樹種によっては枯葉と雪の混じった醜い景観となったりするなどの失敗も目立った。次年度は風洞実験で具体的なデータを収集しようと考えている。

図 1　冬期の看板（旭川市）

2.　教育の場としての雪国

我々の拠点である北海道旭川市は積雪寒冷地である。10 月下旬の初雪から 4 月下旬の雪解けまでの半年間は雪との暮らしを強いられることになる。長期にわたる雪との付き合いに，正直うんざりする市民も多いだろう（図 1～3）。

かつてこの国では雪景の美を保存しようとする自然への愛護から除雪を禁じる地域があったという（ブルーノ・タウト，1939）。降った雪に手を出せない，出さないことが意味するもの。雪景の美を保存しようとする自然への愛護からのルールであろうか。

現在では雪をゴミのように見做し，除雪車が行き交い，土木作業を繰り返す。川沿いに捨てられた死体のような黒い雪塊があきれるほど夥しい。

図 2　除雪・運搬作業（旭川市）

図 3　雪捨て場（旭川市）

一方，マイナス 20 度を下回る 1 月末以降，極寒環境が我々を内省に誘うのか，雪景に詩情を想う余裕を得る。

凛とした静けさや, 偶然あるいは必然に生まれたユニークな雪の造形に目を向ける（図 4～7）。時に，非常に，美しい。

図 4　雪の造形（旭川市）

図 5　雪ぼうし（旭川市）

図 6　波打つ造形（旭川市）

図 7　ユニークな積雪（旭川市）

下品な色調の看板，無責任に貼付けた誘導ブロック，ドブ臭い排水溝蓋，美的感覚を疑いたくなる統一感のないカラー鉄板の家屋屋根の連なり, 全てがホワイトアウトするのである。「人間の企図」により生み出した醜い人工物の形状，その大半を失うことができる恵まれた環境なのである。

旭川市の屋外に設置された古典的な具象彫刻を目視すると，積雪により作者の意図が大きく歪められていることが確認できる。芸術的教育を受けたことがある者なら常識だが，「一流の」作家は僅かなプロポーションの変化に寛容であるはずはない。駅周辺の公共彫刻においてはその作品が本来持ち得ていたモニュメンタリティやシンボリズムを失い，作品の大半が雪に埋没しているものすら散見できる。都市空間での「作品性の任務」を放擲しているのである。酷く見苦しい光景である（図 8～10）。市民は外出する気力を喪失させるのではないか。

雪国において「公共空間にあるべき作品の姿」とは何か。市民が求めるのは「地元出身の作家」が作ったというありふれた「地元愛物語」や著名作家の「署名ブランド」ではない。南国で使われがちの場違いな素材で作られた彫刻作品のなかには，夏期には活躍していたとはいえ，冬期の厳しい気候に耐えられない作品すらある。その場合は保護シートで養生することで，作品であることから無責任に中座しているのである。

図 8　冬期の公共彫刻（旭川）

図 9　積雪により歪んだ作品（旭川）

図 10　具象彫刻の芸術性の喪失（旭川）

3. 署名

筆者の一人である藤森が北欧で取得した車の免許証を見ると次の更新日は免許取得日の 40 年後という。顔写真は印刷されているものの，40 年もの間，それが本人保証の決め手になることはないであろう。

顔は変わる。我々は明日メガネが必要になるかもしれないし，2 時間後に白髪になるかもしれない。今もマスクをしている。顔写真の容姿は刻々と真実から離れてゆく。よく見ると免許証には本人の「署名」が印刷されており，日本のそれとは異なっている。

この筆跡が揺ぎ無い自己同一性となっているようだ。
署名は本人と免許証との間に他の誰も介入の余地の無い，閉じたコスモロジーを保っている。署名は本人の分身と言えよう。こうした「署名」の問題を考える時，いまだ印影に真実を追う日本のコンテクストに置くと，どこか不鮮明になり大切な問題を避けてしまう。

4. デザインにおける署名性

絶え間ない産業活動で知られるファッションデザイン界においては Nothing is Forever.といわんばかりに新作が大量生産・消費されていく。デザイナーの作風が他と差別化されなければデザイナーのアイデンティティが保証されないという特異な環境である。この世界にあっては，真っ先に「あなたの Signature Design は何か？」とデザイナーに問われることが多いという。
こうした「蝶」のような一過性のデザイン界を

仮想敵としたうえで，安易な Timeless Design というキーワードで対峙できるとは思えない。だが近年の国内外の産業デザインや家具，あるいは建築のデザインフェアーに参加すると，新作至上主義のファッションデザイン界にあまりにも影響されている嫌いがある。華やかな衝撃

に目が慣れるころ，自己顕示としか思えない「俺が，俺が」の強欲なデザイナーが繰り返す虚しいアジテーションに対して，受けて側は鬱積した感情の残滓とともに消費欲が萎え「もうこれ以上何も要らない」とすら思えてくるのである。

デザインすることが社会的な行為であるならば，「デザイン」とは作者の個人的な趣向であるとか，自己表現とか，作風とか，個性の顕示とか，「自分の分身」を作品に刻む行為ではなくて，こうした作者の「署名」ともいえるものをできる限り弱めて，漂白して，モノを社会に開いていく行為であるのではないだろうか。

デザインの語源は脱・サインという説すらあると耳にしたこともあったが，sign は「作者の signature」の意味に限定しないため，本研究ではその真意を追跡しない。

あえて誰が作ったのか仄めかす署名などデザインには不要ではないだろうか。

5. 署名の弱いデザイン

近年，高架道路のジャンクションや工場，ダム，換気塔などの土木的構築物が人気である。それらはただそこにあり，作者の署名が見えづらい心地良さもある。

本来異なる目的で建てられた建物が用途を変更し生まれ変わった事例に誘惑されるケースが目立つ。ヨーロッパでは駅舎や工場が美術館に（図 11～14），宮殿や刑務所，戦争の施設がホテルになるなどの事例が多い。

図 11　NORDKRAFT（デンマーク）
工場のコンバージョンによる文化施設

図 12　NORDKRAFT
最小限に追加された要素

図 13　NORDKRAFT　ロビー
工場の名残も見られる

図 14　NORDKRAFT 展示室

そこでは「新築」でうんざりさせられる作者の個性的表現や，「訪問者をこういう気持ちに操ろう」という押し付けの仕掛け，意図が限りなく弱くとても居心地が良い。

本研究では作者の介入が最小限に留まる作品作りのデザインとは何かを模索し，雪国における降雪現象により絶え間ない変化を繰り返し偶然の造形を生む「雪景」に注目した。ここには作者のコントロールの効かないデザインがある。換言すれば，作者の署名を作品に刻むという従来のデザインの方法から脱却することで，心地のよい作品を創出することである。

6. 本研究の実験・試行状況

過去には 2008 年 12 月 20 日より 2009 年 4 月 12 日までの期間，札幌芸術の森美術館の中庭にて作品展示を行った（藤森, 林, 伊藤 2008）。現場での設営には有志学生が参加した（図 15）。われわれが提案したものは，高さ 1,500 mm，幅 1,200 mm，奥行 600 mm のユニット 24 台を 30 mm 幅のスチールのアングルで組み立て，ステインをかけた唐松合板を書棚状に 3 段設けた。中庭のスケールの検討と訪問客に見られる視点・状況を検討した結果，8 台を 2 列に並べたグループを 3 つのクラスターとして少々列の角度を変えて配列させた。日照条件を平等化せずに「誤差による結果」を期待した。設置場所が人工的な美術館の中庭という，いささか特異な空間ではあったが，そこには雪景の絶え間ない変化を繰り返す状況が確認された（図 16～23）。

図 15　札幌芸術の森美術館での設置作業

図 16　札幌芸術の森美術館での展示

図 17　詳細の雪の形状
（写真は札幌芸術の森美術館提供）

図 18　降雪はじめ

図 19　積雪の経過

図 20　思いがけない形状

図 21　ふんわりとした形

図 22　古民家のような形

図 23　融雪の様子

現在，具体的には幾つかの試行を継続的に繰り返している。
2010 年 10 月 31 日より東海大学旭川キャンパスにて計 40 台までユニットを増設し有志学生を主体として調整がなされた（図 24～25）。キャンパス内にて日照，通風条件など，異なる「地域」に設置し，その変化を記録している（図 26～44）。具体的には本館校舎と工房との間にある雑木林の中（**グループ A**）と石狩川を望むアイヌの遺跡前面に湾曲する遊歩道脇（**グループ B**）に配列させ，ユニットごとの日照や通風の条件に大きな変化を与え経過を見ている。

図 24　旭川キャンパスでの設置作業
有志学生を主体として行われた。

図 25　同左。検討の様子

図 26　旭川キャンパスでの展示
降雪前の様子（グループ A）

図 27　11 月の紅葉時期（グループ A）

図 28　雪を待つ 11 月末
（グループ A）

図 29　白樺とのコントラスト
（グループ A）

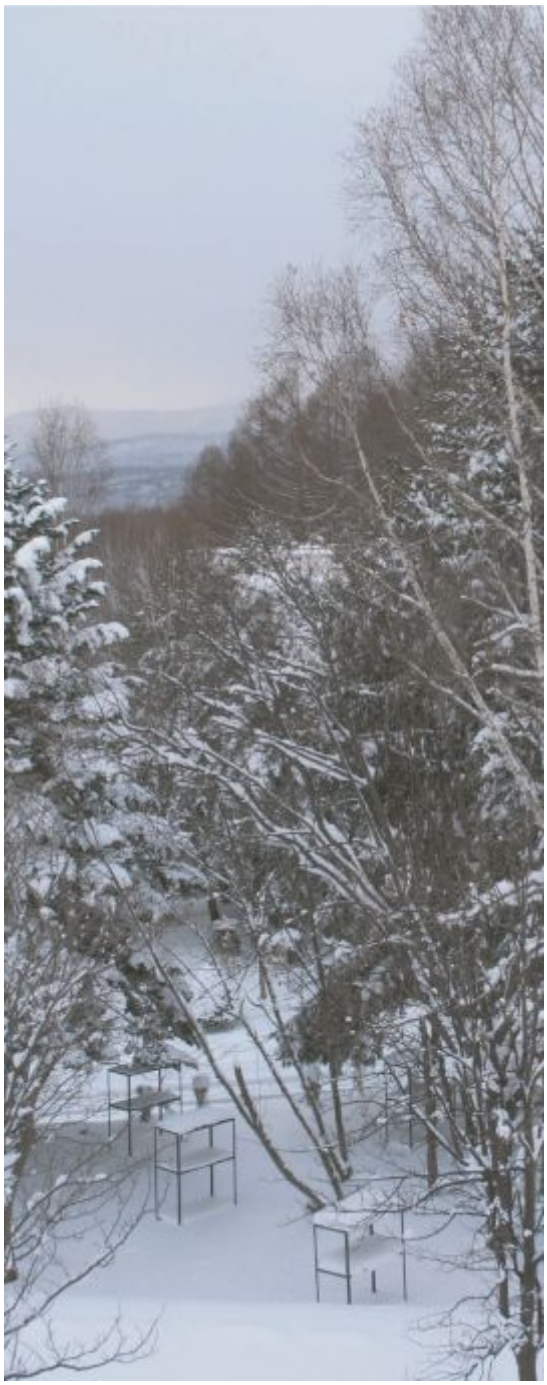

図 30　自然の中の脆弱な署名

図 31　背後はアイヌの砦の遺跡

図 32　轍の脇に配列されたグループ **B**

図 33　背後はアイヌの遺跡

図 34　雑木林のなかのグループ **A**

図 35　人の足跡，轍とのコントラスト

図 36　豪雪時の様子（グループ **A**）

図 37　軽微な誤差（グループ **B**）

図 38　降雪時のグループ **A** より

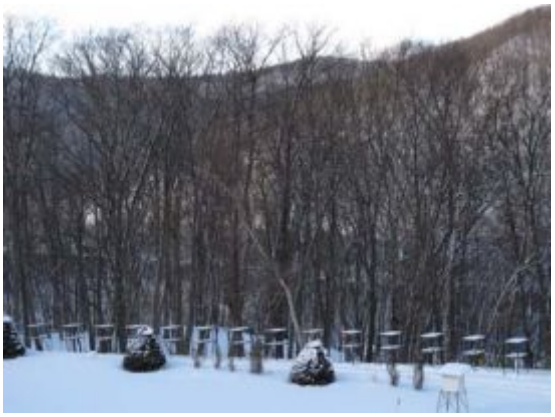

図 39　グループ **B** の一望

図 40　ふんわりとしたオブジェ（グループ **A**）

図 41　同左詳細

図 42　ユニークな造形（グループ **B**）

図 43　グループ **A** の遠望（**12** 月）

図 44　バックグランドを引き立てる点景として演じるグループ **A**

7. 雪／作者

たゆたう雪景。高さの異なる 3 段の「棚」の上には，通風や日照などの条件の違いを大げさに誇張した雪景の輪郭が現れることが確認された。本年の 1 月 10 日豪雪の旭川にて，上段に膨らんだ風船のような雪が，中段には唐松のテクスチャーを漂白する吹き溜まりが，下段には深い雪穴が現れたことを記録している。その数日後には日中の雪解けでクリスタルな氷柱のプリズムを量産し月明かりを仄かに屈折させていたと記憶している。醜い雪魂を晒したことも少なくない。

われわれは，そこに現れる雪景を観察することで，ささやかな享楽を期待しながら雪彫刻で城を「もどく」ような従来の稚拙な雪像と決別した（図 45）。

図 45　人為で造られ人為で撤去される従来の雪像（旭川市）

8. 今後の計画

日常会話で主語を省きがちの日本人にとっては，謙虚に作り手が後退し内実を伝達するデザイン，署名の弱いデザインを得意とするのではないだろうか。

雪こそが作者である。こうした認識は，つくることの責任の放棄ではなく，全てを作為で制御しようとする「こうあるべき」という従来のデザインのあり方への批判である。「こうあり得る」という寛容のジェスチャーが意味するもの。それは，部外者をも容認していこうとする雪国の寛容さをあらわしていると考えたい。

今後は北海道立総合研究機構・北方建築総合研究所の協力で人工雪を利用し，スケールモデルによるシミュレーションを計画している。ここでの検討を踏まえた上で，より効果的に雪景のバリエーションを楽しめる方策を練っていきたいと想う反面で，これはわれわれの出発点であるのだが，雪の気まぐれさを科学の力で飼いならすことはできない，というアンビヴァレンスも意識している。またそのような蠢く物体に我々の署名の痕跡を，作者としての優位性を，決して残すことはできないだろう。

現在，旭川市では雪と寒さとの共存を目指した街づくりをすすめている。超高齢化社会を迎え，高齢者が室内で春を待つだけの人生の空費は避けたい。筆者等が昨年の記録的豪雪時期を狙って北欧・ノルウェーの諸都市を視察したところ，屋外での活発な都市空間の利用光景が見ることができた（図 46～49）。

本研究では冬期に活用されない旭川キャンパスの魅力を，道外出身の学生の新鮮な視点を交えながら，降雪というキーワードで新しいキャンパスの魅力を引き出した経験となった。厳しい自然に作品を配置する中でイメージとは異なる結果に翻弄されるなどの失敗は多いのだが，実作を扱うゆえの確かなやりがいを対価として得たと思われる。

今後は雪国の冬の魅力的な屋外環境を整える目的で，筆者等と芸術工学部の有志学生，旭川市内の観光名所とが協働し，市内の公共空間にて本研究を展開していこうと考えている（図 50～55）。

図 46　元気な子供たち（ノルウェー）

図 47　雪で遊ぶ親子（ノルウェー）

図 48 そりによる遊戯（ノルウェー）

図 49　託児所の園児たち（ノルウェー）

図 50　積雪寒冷地における駅前モニュメントのあるべき姿。検討中のスタディ。㈱タウンアートとの協働による。

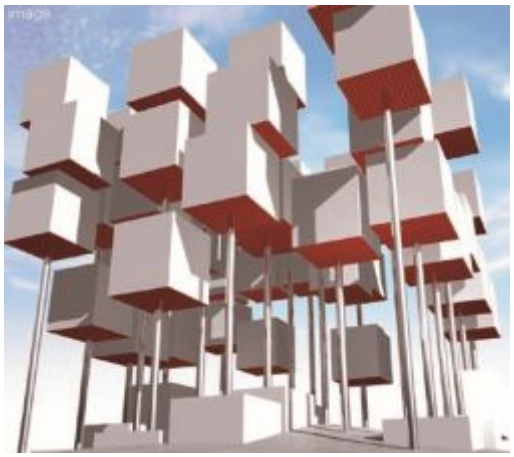

図 51　同左。夏期の様子。

図 52　模型による全体構成の検討

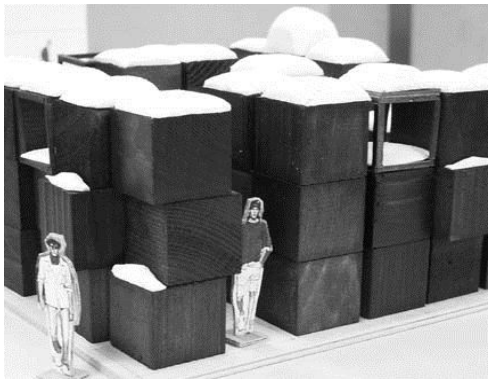

図 53　模型による通路幅の検討

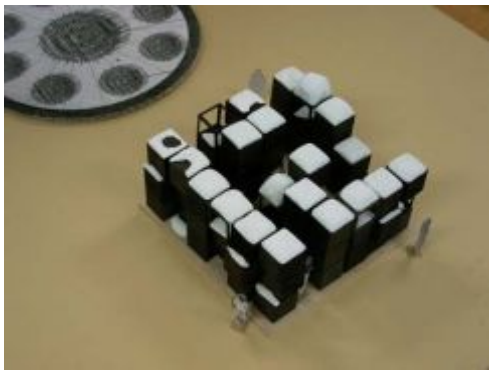

図 54　俯瞰による検討

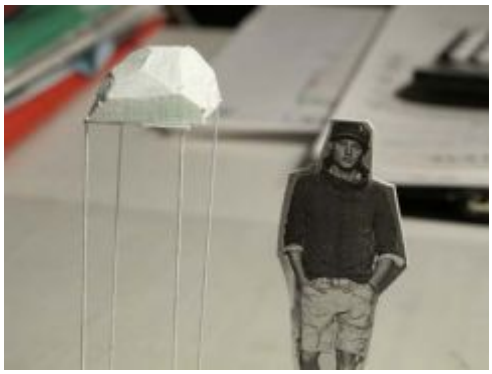

図 55　風に揺れる雪塊の検討案

謝　辞

本研究の一部は，科学研究費補助金〔基盤研究（C）21520160「屋外環境構築における積雪造形手法の研究」(林拓見，伊藤明彦，藤森修)，平成 21～23 年〕の助成を受けたものであり，謝意を表する。

参考文献

ブルーノ・タウト（1939），篠田英雄訳，『日本美の再発見』，岩波新書

藤森修，林拓見，伊藤明彦（2008），「SNOW FALL/いとなみ」，『紀要』（東海大学芸術工学部），創刊号，5-10

（受付：2011 年 1 月 31 日，受理：2011 年 3 月 2 日）